
推理作家と名探偵

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

推理作家と名探偵

【Nコード】

N7589C

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

5年前に起きた二つの事件に異色のコンビが挑むラブコメ要素が詰まった物語。

++プロローグ++

今から5年前。都内のある廃ビルで殺人事件が起こった。

被害者は、田村^{たむら} 吉彦32歳。都内の銀行に勤める職員である。

事件当日午後6時頃、彼は何者かに因って呼び出され、殺される
とも知らずにノコノコとやって来て、待ち伏せしていた犯人と鉢合
わせ。正面から腹部を包丁で刺されて間もなく死亡した。

そして同じ頃、彼が生前勤めていた銀行でも事件が起こっていた。
それは、覆面で顔を覆った一人の男が拳銃を持って押し入り、銀
行から現金150,000,000円を奪って逃走したと言う事件
だ。

警察は両方の事件に関連が無いか調べたが、未だに詳細は不明。
そして、5年の月日が流れ・・・。

名探偵がやって来た！

有名な推理小説作家の小此木 遥。

彼女は都内のあるアパートに住む現役の高校生だ。

そんな彼女が、部屋の壁に設置された液晶テレビでニュースを観ていると、画面に有名な高校生探偵、鷺ノ宮 優助の映像が映され、画面右上に「あの名探偵、またもや事件解決！」と言うテロップが表示された。

「へえ、名探偵かあ」

遥は頬をほんの一寸だけ赤らめてニヤニヤした。

「会いたいなあ」

ピンポン と、部屋にチャイムが響く。

遥はテレビを消すと直ぐ様玄関に駆けてドアを開けた。

外には、先程画面に写っていた人物が立っていた。

「えっ・・・？」

硬直する遥。

「あの、作家の小此木さんですよね？」

遥は興奮した。

「あつ、あなたはあの有名な高校生探偵の！初めましてっ、小此木遥です！」

遥はそう言ってお辞儀をし、顔を上げて訊ねる。

「それで、あなたの様な御方が私にどの様な御用件で？」

すると優助は便箋を取り出し、遥に差し出した。

「何です？」

遥は便箋を手に取り、開けて中から紙を取り出した。

「えっ、ええ！？」

遥は声を張り上げ、頬を真っ赤に染めた。

（こっ、これってラブレターじゃん！こんなの私なんか貰って良いの！？）

戸惑う遙。

「あの、やっぱり、駄目ですか？」

優助は恐る恐る訊ねた。

「中入って！」

遙は優助を強引に中へ引き入れ、ドアを閉めて施錠し、部屋の全ての窓とカーテンを閉めて電気を点け、彼をリビングに案内して席に着かせ、お茶を用意した。

「あの、何でこんな事・・・？」

その問いに遙はパンツと机に両手を置き、

「何で？つて、マスコミに見られたら大変な事になるじゃないですか！」

と怒鳴り散らした。

優助はあまりの声のでかさに耳を押さえた。

「で、私と御付き合いたいと言う事だけど、私なんかで良いの？
てか何で私ん家知ってる訳？住所や電話番号等の個人情報は一切公開してない筈だけど・・・？」

「あの、先ず落ち着いてくれませんか？順番に話すから」

遙は深呼吸をした。

「えっと・・・じゃあ、最初に私ん家を知ってる訳を聞かせて？」

「それは一寸・・・」

「ふうん。言えないんだ？」

遙は不適に微笑んだ。

優助は俯いて答える。

「す、ストーカーしてたんです」

「えっ？」

「1ヶ月前、出版社から君が出て来たのを見掛けて、可愛いなって
思つて、後を付けたんです」

（嘘、全然気付かなかった・・・）

「それで、家が解ったから、今度は出版社に行つて何してる娘か聞いたんです。そしたらあの本書いてる娘だったのが解つて・・・。

あ、この本読みましたよ」

優助はそう言って一冊の推理小説を取り出した。

「へえ、読んでくれたんだ？」

「まだ途中だけだね。この他にも家に沢山ありますよ。俺、小此木さんの大ファンだから」

「あら奇遇ね。私もあなたの大ファンなのよ。・・・って、この話は置いて、何でもっと早く来なかったの？」

「タイミングが合わなかったんだ。ここところ、事件続きで時間が無くて・・・」

「・・・成る程、だから今日な訳ね」

「はい。それで、お返事の方は？」

（そうね。悪く無いかも。だって彼と付き合つてれば事件が転がり込んで来る訳でしょ？で、彼が解いた事件を私が小説にして出版社に売り込む。うん、儲かるわ！）

チャキーン！ 遥の両目が両さんの如く¥に成る。

「良いわ！あなたと付き合つてあげる！」

「えっ、ホントに良いの！？何か夢みたいだな」

「ホッペ抓つてあげる」

遥はそう言つて立ち上がり、優助の頬に手を伸ばして思いつ切り抓った。

「いででででっ、夢じゃないです！てか放して！」

「嫌だ。後1時間は続けるわ。スニーカーした罰よ」

「傷害罪で訴えるぞ」

「スニーカーもいけない事よ？」

言葉に詰まる優助。

そうして1時間が経ち、優助は解放された。

「それじゃあ、俺帰ります」

優助はそう言つて席を立てて玄関に向かう。

（あ、駄目。行っちゃ駄目！）

そう思つた遥は咄嗟に優助の下に駆けて腕を掴んだ。

「あの、もう少しだけ、ゆっくりしてつてくれると、嬉しいって言うか……。否、良いのよ？あなたが忙しいなら」

（つて、何引き留めてんのよ私は！？）

「解った。君がいて欲しいなら、暫くいてあげる」

「えっ……。？」

刹那、遥の頬が赤く染まり、心臓がバクバク高鳴る。

（ちよっ、何この展開！？夢なんかじゃないよね！？てか落ち着け私の心臓！）

「ん？顔が赤いけどどうしたの？」

「嘘！？」

遥は慌てて顔を両手で覆った。

顔が火照って汗を掻いている。

「ごめん、やっぱ帰って？」

そう言つと、遥は顔から手を退けて優助の背中を押して玄関まで行き、鍵を開けて外へ追い出し、「また明日！その角にある公園で待ってるから！」と言つて靴を渡し、ドアを閉めた。

遥はドアを背にして寄つ掛かり、「はあ……。」と溜め息を吐いた。

同じ頃、都内の廃ビルでは、ある男がセーラー服の女子高生に襲われていた。

「やめろ！助けてくれ！」

男は叫んだ。

しかし、此処は屋内。しかも外に音が漏れない仕組みなので、当然男の叫び声等聞こえない。

「うわっ！」

男は躓いて転んだ。

女子高生は男を殺意に満ちた顔で見つめ、持っていた金属バットで男の頭を殴り付けた。

「うっ！」

男は呻き声を出して意識を失った。

女子高生は動かない男に対して何度も何度も繰り返すバットで殴り付ける。

そして気が付くと、男は血まみれの肉の固まりと化して死んでいた。

女子高生は血まみれのバットを捨て、徐にその場を跡にした。

殺人発生

翌朝、遙は自宅近くの公園のベンチに座って文庫本を読んでいた。本を読んでいるのは、優助が来る迄の時間潰しである。

「おい」

と、優助が駆けてきた。

遙は読んでいた本にしおりを挟んで閉じた。

「遅い」

「スマン。寝坊した」

遙は優助を睨んだ。

「怒ってる？」

「別に怒ってませんよ」

遙はそう言って立ち上がり、「行こうか」とベンチを離れる。

「行くって何処へ？」

「で、デートに決まってるでしょ！」

遙は頬を赤らめながら言った。

「まさか、昨日の今日でもうプランを？」

その問いに遙は、バッグに本をしまい、映画のチケットを2枚出した。

「それってもしかして!？」

優助は強引にチケットを奪取した。

「これ人気が高くてなかなか手に入らない例のチケットじゃん！何処で手に入れたんだ!？」

「貰ったのよ。出版社の人に。原作者名見て」

優助はチケットの右下辺りに小さく書かれた原作者名を見た。

そこには小此木^{おこのぎ} 遥美とある。

「それ、私のママがデビュー当時書いた推理小説の実写映画」

「えっ、小此木さんってあの小説家の娘なの!？」

「そうよ。知らなかった？」

「うん、知らなかった」

「そんな事より、早く行こう？ 時間無くなっちゃう」

遙はそう言って振り向いた。

優助は頷き、遙の横に付いて共に歩き出した。

二人は公園を跡にして暫くすると、今は使われておらず、近い内に取り壊しが決まっている廃ビルの前を通り掛かった。

そのビルの前には、頭に赤いランプを載せた白黒のツートン車が数台、ハザードをたいて止まっている。

「ねえ、鷺ノ宮くん？ 一寸邪魔してみない？ 事件かもよ？」

「えっ、でも映画が」

「そんなの別に今日じゃなくても大丈夫よ」

遙はそう言くと、優助の手を掴んで、廃ビルの入り口に張られた Keep out と書かれた黄色いテープの前にいる警官の所に駆けた。

「お巡りさん、此处で何かあったんですか？」

警官はキョロキョロと辺りを見回すと、小声で言った。

「（実は先刻、此处で殺人事件が遭ってね。今捜査中なんだ）」

「殺人事件ですか！？」

遙は眼をキラキラと輝かせた。

「あのっ、その事件の捜査に協力させて頂けませんか！？」

「ダメダメ、これは警察の仕事だから。それに、現場をウロチョロして荒らされでもしたら困るから」

遙は困った顔で後ろを振り向いた。

優助がいない。何処に行ったのだろうか、疑問符。

遙は閃いて頭に電球を浮かべると、警官の方に向き直って手を掴み、その手を自分の胸の上に導いた。

「ちよっ、君！？」

警官は顔を真っ赤に染め上げた。

「触りましたね？お巡りさん」

遙はそう言つて息を大きく吸い込み、叫ぼうとしたが、慌てて警官が彼女の口を塞いだ。

「（どうして欲しいんだい？）」

遙はニツコリ笑顔でこう言う。

「中に入れてくれないかな？」

警官は仕方があるまいと、黄色いテープを持ち上げた。

「痴漢」

遙はそう言つてテープを潜つて中に入つて行つた。

勿論、この警官が遙に対して殺意が芽生えたのは言うまでも無い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7589c/>

推理作家と名探偵

2010年10月12日15時42分発行